



# ヴァイン英雄譚



1

夏川 宙

# ヴァイン英雄譚

## 1

「見えてきたぞ！」

スカイブルーの髪カミの少年が、興奮気味に言った。

「……ほんとだ」

蒼眼のブロンド美少女の視線の先に、直径約96マイルガ  
ジェスーパー・マジックシッフ（約48km）の超巨大円盤型魔法船《ルフラン》が、  
紺碧の大海原の水平線上にぽつりと姿を見せている。

青空に雲は少なく、西方には美麗な浮スカイ・アイランド遊島群さんさんがくつき  
りと見られ、陽光が燦々と降りそそいでいる。

「とばそう！」

「ええ」

2人は、小舟を引く、イルカに似たブルーの海獣ラッツへ、“加  
速”を命じた。

ラッツが、ぐんぐんスピードを上げてゆく。

塩の匂いを含んだ、気持ちの良い風が、2人を撫でる。

「きゃっほ—————っ！」

「爽快、爽快！」

「日が暮れる前に、着きそうね」

「うん」

少年は、ヴァイン。

16歳、碧眼・淡褐色肌の戦士である。

異世界から、剣と魔法が支配するこの世界に強制的に呼び

# ヴァイン英雄譚

寄せられてしまい、自分の世界に戻る方法を探して、世界を巡っている。

ブルーベースにホワイト模様のトラベラージャケット、ホワイトプロテクターという出で立ちだ。

「……すごい大きさ」

少女の端正な白い顔に、驚愕の色が浮かんでいる。

今や、スーパー・マジックシップ「ルフラン」は、その雄姿が彼女の視野に入りきらない位置にまで迫っている。

船体は木造であり、上部には、広大な森、巨大建造物群などが見られるが、一際目立つのが、7つの<sup>スーパー・シルバータワー</sup>銀色超巨大塔——円状・等間隔に、<sup>そび</sup>聳えている——だ。

少女は、ファミという名の魔法使いである。

過去にヴァインに命を救われ、それ以来ヴァインと行動を共にしている15歳。

グラマーな女体を、レッドベースにブラックをちりばめたトラベラージャケットに包んでいる。

左腕に装着された<sup>ゴールドカラー</sup>黄金色のプレスレット——グリーンの美しい魔法石が嵌めこまれている——が、目を引く。

「確かに。これほど巨大な船が海に浮いてるなんて、なんだか夢を見てるみたいだ」

「この船に使われている魔法は、<sup>いにしえ</sup>古の神聖魔法かもしれないわ」

「へええ、古の神聖魔法ってすごいんだね」

「大陸を動かすことも、出来たそうよ」

## ヴァイン英雄譚

「とてつもない力だ。……それほどの力があるのなら、僕を、僕の世界へ送ることも出来るんじゃないかな？」

「それが出来るなら、とっくにあなたに教えてるわよ。

古の神聖魔法に関しては、あたしもかなり勉強したけど、異世界へ人間を送る魔法は皆無よ。

残念だけど」

「……分かった。——あの銀色の塔群は、とんでもない高さだね」

「ええ」

「何に使ってるのかな？」

「分からないけど。魔法動力炉や何らかの兵器の可能性が、考えられるわ」

「兵器だったら、とても恐ろしい威力を持ってそうだ」

「あの巨大さだものね」

「兵器でないことを、祈るよ」

「そうね」

2人は船着き場に到着し、小舟を係留した。

太陽は水平線に姿を隠しつつあり、その上方に、とても美しい夕焼け空が果てしなく続いている。

「モンスターがいるかもしれない。気を付けて！」

ヴァインが、鋭い眼光を周囲に投げかけながら言った。

「了解」

ヴァイン達の前方には砂地が広がっており、その先は鬱蒼<sup>うつそう</sup>とした森である。

## ヴァイン英雄譚

「人はいないね」

「……そのようね」

「……魔法の泉はルフランの中央部にある。整備された道は見当たらないから、あの森を越えよう」

と、魔法地図マジックマップを見ながら、ヴァイン。

「分かった」

2人は、早足で歩き始めた。

「呪いを解く力を持つ魔法水なんて聞いた事ないよ。古の神聖魔法によるものかな？」

「多分、そう」

「そっか。……信じられない力だ」

「……あたしには、あなたの人良さが信じられないわ。

小村の村人全員が謎の呪いに苦しめられているからって、モンスターの巣窟そうくつと化したこのルフランへ、解呪の効力を持つ魔法水は無報酬で取りに来るなんて！

それは、あの村を治める領主が軍隊を用いてすべき仕事であって、あなたがすべき事じゃないわ。

あなたにとっては、立ち寄っただけの無関係な小村じゃない」

「僕は、困った人を見捨てることが出来ない性分なんだよ」

「全く……」

ファミは呆れ顔だが、嫌悪感は浮かんでいない。

「何だかんだ言っても、ファミも来てるじゃないか。ファミもお人好しだよ」

「あたしは、命の恩人のあなたに恩返しをしてるだけよ」

## ヴァイン英雄譚

と、わずかに頬を赤らめて、ファミ。

「ほんとかなあ」

「ほんとだって！」

「……しっ！」

ヴァインは、緊張した顔で、腰の鞘に納めた愛剣エルンティングの柄に、手をかけている。

「何？」

「かすかな音が聞こえた」

「ギャアアアアアアアッ！」

突然、森の中からグリーングフトの小鬼の群れが現れ、恐ろしい叫び声をあげながら、2人の探索者へ襲いかかってきた。

「モンスターだ！ 援護して！」

スカイブルーの髪の少年が、エルンティングを抜き放ち、ダブト群へと疾走する。

「了解。——ファイアボール！」

ブロンド美少女が手にした魔法マジックロッドの杖の先端に輝く、魔法マジック・ブルークリスタルの青水晶の先に大きな火球が生じ、前方に突き進んだ。

火球は、先頭のダブトを直撃する。

「ピー——————ッ！」

灼熱した炎に包まれたダブトは、甲高い悲鳴をあげ、砂地に突っ伏した。

「せいっ！」

ヴァインが、2番手のダブトの肩口から、腕を切り落とす。赤黒い血を吹きあげて、ダブトは倒れた。

ヴァイン英雄譚

<http://p.booklog.jp/book/65419>

著者：夏川 宙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/zcfzv5dyrd/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65419>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65419>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ